

息心の居所ハ泉州堺くしや丁はまにして、はじめハはあれはてたる所なるを、門人のな
かにもひたしきが、うちよりて脩覆をし、所々のかこひをもぬすみ、犬の入ざらるやうに
して、表通りハ板べいといふにして、内ハ大かた畑なり。晷の間ハ五所あり。一所ハ来客
を坐せしめ、一所ハ翰墨の諸用と息心常座の間とし、臥もまた此間に定め侍り。一所は書
籍をつみ、また四時の葛裘臥具などを收拾侍る。一所ハ随侍しもの、よろづ経営のこと
をとりはからい侍るなり。一所は竈のうしろにして二時の粥飯を喫侍る。惣たゝみの数
三十畳ばかりもあるかなきか、是より大なるハいふべからず。是より小なるものを見るに
中々数もかぎりもまことに無量無辺の衆生なり。

人数ハ息心共に四人なり。みな翰墨の扶助を蒙り侍るなり。四人、頭を聚めていろく
さまぐのこともものがたり、一日一日と経過し侍るなり。息心今とし七十歳なり。五十
年ばかりこのかたの事は、西ハ大すみさつま、東はむつの金華山まで遊歴し、東海道も木
曾地も往来し侍ることなれば、山川さとのいふべきほどの事を大概覚へて是をものがたり
し侍るが、中く十日ハつかにかたりつくすべきにもあらず。

はなしをたへずすべいろくと変じて、人のことをいふかとおもへば、はや禽獸草木
とうつりかへる。貧者をいへば富者、智者をいへば愚人、善人のことをいへばいふほど悪
人の数々、孝順をものがたりすれば、不孝不忠の不屈者、その善報悪報の天鑑ただしき道
理、いにしへよりそのためし多き事共、大にしてハ、国王大臣より諸侯大夫より士庶のも
ろく、治の事、乱の事、聖王賢臣のありがたきも、悪王愚臣のこりつゝしむべき事共を、
一々記録して後のよの君臣上下此書をよみて、その善悪を詳にして、誠意正心、脩身齊家、
孝弟忠信、仁義礼知、これをしれよ、是をきけよ、博く学よ、詳に問よと教をなしたもふ
事なりなどいふことをものがたるなり。

富も貧も天命なりとおちつき、読書写字のことを懈るべからず。不思議の樂を得侍る事
にして、人に生しがいあるとよろこび、一日もこゝちゆたかに日月を拝み奉るを、まこと
の人とすべし。学もんして名をあげ身をあらハすなどハ、のぞみとすまじきことなり。たゞ
古の治乱興亡、人の善悪、今のよに是を明々鑑み侍る。よろづの事今もむかしも同じ事な
り。たゞ文学のことおこりたるハ、唐土にハむかしのやうに人のゑらびもあるとき侍り。
壮年の人々やゝもすれバ口錦繡を吐出し侍る。各々千載不朽の盛事をなしとげらる。みな
史冊にも文集にも是をあらハして天下に公たり。是を一々よむことなり。それを富也とこゝ
ろへあるべし。

杜少陵の、人生七十古来稀なりといふハ、年ばかり犬馬と同じきをいふにハあらず。陶韻ごときものゝ、七十八十いきのびたればとて、古来稀なる部に入るまじき事なり。さかいといふ所ハ水なき所なり。四万人ばかりかまどをならべ侍るに、茶のこと、めしのこと、汁菜にいたるまで其用水をバ買ひもとめ侍るなり。其水南北と中間と三所ありて、各々その主この水をうりて妻子をやしなひ侍る。中間にあるハ長泉寺といふ。浄土宗なり。水一荷を二銭と定めて一年百両あまりのことなり。大寺にして檀那も五六百人ありといふ。借金ハいつも千両ばかりにして、畳敷凡四五百畳の間敷、常念仏のあか／＼と肥へふとりたる道心、なにゆへあたまをそりこぼちたるや。大ごへの念仏かねのねもひときハさへかへりたり。しゆ木の手ごゝろさいやかるとの工夫より仕合と、やじりきりの世界を超脱して、今此ほとけのみのり、なむあみといふつらたましいゝ、さても／＼ゆだんのならぬ発心者、住持のこゝろつかい、親切なる檀那を見ると、はやこのかねたゝきのうハさ、どふでも、釈迦やあみだやくはん音地藏ハ不可思議の功德、無量無辺の御慈悲、たゞたゞたすけばや／＼と御慈念あることにして、法華にも衆罪霜露のごとし恵日能消除すとあり。きのふの外道今日の釈華、一念転じて大善人となり侍ることをしりたるや。今すこしといふ間の悪がおそるべし。

人のよしあしハいハぬがよしといふなれども、随分是をいふがよし。そのいふにもかならず取舍あり。そのみる所をとりて、其すつる所をすつるなり。そのわかちなきものを愚者とすが、まことの人にハ孝弟忠信自然とそなハリあることなり。難あるも難なきもみな天然にして、その善ハ善とあきらかに、其悪ハ悪とはなハだ分明に、天是を照覽したもふ事なり。五刑の科のあきらかに行ハせらる。年々人々是を見、是をしる。おそれざるべけんや。つとめて善事をのみすべき事なり。

人の要害ハ我が身を第一とするがゆへに、幽厲けつちうハ我が身を忘れたまいし君なるぞとよゝさだし侍るなり。我が身を守りて家に子孫に冥加を伝へ侍るなり。

人の非をせむるハよろしからず。その非を見て我が非を改る事なり。かならず我に人にまさりたる非あるものなり。人の善事をさまたげ侍る人にハかならず殃多し。恨みある人といふとも善事をさまたげ害をなすべからず。古徳の教に、人をころすつみハ軽く、人を害(そこなふ)るつみハ重しとあり。害ハそのふといふ文字なり。人をころしたるハ国法あり。その人をころさる害したるハ、そのすがたあらハれず、むかしより大和もろこしよき人々の悪人に害せられ、苦勞し侍る人々、史伝にみな是を記録し侍るなり。屈子の泪羅、韓公の潮州に、又此方にてつくし宰府の御神、人々是を能くしり侍るなり。

人の善悪ハいつのよもこれあるものなれば、是を不可思議とハいふべからず。三皇五帝周公、孔子の御門聖人賢人あまたおハせしよの中に、名高き愚悪の者共いでき侍るなり。みな聖者賢者をあだのごとく邪魔し侍るなり。害をのがれたもふ工夫のみをこらし侍る故に、後のよに、いよ／＼聖に、いよ／＼賢に、いよ／＼愚に悪にと、人々是を分曉し侍るなり。悪人あるゆへに善人あらはるといふ。悪ハ善のたすけといふし人もあり。

尊と卑と、貴と賤とハその品数かぎりもなしといふうちに、尊貴ハ指を操て是を数へて即ち是をしる。その尊貴に対して、卑賤といふときハ農工商みな卑賤とすべし。又その中にしてその高下あるハ、やハリ卑賤の中の高下にして、尊貴といふハあるまじ。みな君臣、父子、夫婦、朋友の道ありてその道ハみなひとつなり。その人のその道理ハ大学一冊にして尊も卑も貴も賤も皆此大学一冊、この八条目にたがふことあたはず。このゆへに尊卑の差別なく書をよみて人の道理を詳に知るなり。故に尊貴といふとも無学なれば卑賤に類し侍るなり。此ゆへに学識ある人の卑賤に混し居侍るをたづねもとめて是を師とし、崇めてよろづ人道を詳にしたもふことを、むかしにたづね今を問ふといふ。その例も一々記伝し侍る事にして、しる人がみな是を知るなり。樵漁の木こりすなとりにもよきことを問へよと教へたもふ事なり。位ある御人などハ是非に学もんをなさるべき事なり。全体学もんありて、才識の秀ですぐれさせたもふが、その位にハつかせたもふ事なればこそ、翰林院のもふけありて博士を御ゑらび、太子の太伝をなどいふこと、よ々の記冊にのせあらハし侍る事なり。

人の生質、天然といふか自然といふか百人ハ百いろなり。そのうち大概五常のいつ々のつねあるハよしといゑり。故にその道理を学ぶことなり。とても、文人才子などいふことの、よに秀で侍る事などハならぬことなり。ただ／＼ありきたりの身分をそこなひ侍らんやうに、こゝろもちを大事にすべし。脩身齊家の事のみをいふ人ならば、是を師とし、是を友とすべし。文学をいふのゝしり、人の詩文章をとかく議論し、あたら光陰を間過し侍るものすくなからず。必ずその類に入るべからず。矢をさぐるごとくすべし。また真実に書をよみて人の道理をよろこぶあり。これを親友とすることなり。いづれにゆくといふとも、貧窮はよろしからず。経済のこゝろをつねとするなり。妻子もある人などは、よろづこゝろへあるべき事なり。一人の難義、一類帯累おろそかにすまじき事なり。今日きりのこゝろ、あすハまゝよといふ、破家散財の輩あるものなればこそ、誠意正心脩身齊家をよめよ、きけよと、聖諭なしたもふなり。

富貴ハ人々このみて得べきことにあらず。貧賤ハもとめずといふとも得やすきことにし

て、人々経営のみちをうしのふことあれば、其時より漸をはじめて、盛の衰、栄の枯、まぬがれがたきをつゝしめよ、おそれよと、子共の時より是をゝしへ、よめよ、かけよ、人の道理をくハしくしれよといふを、聖教なしたもふ。よきにハよきむくいあり、あしきにハあしきむくいありと、仏もひたすらにときおしへたもふことなり。なか／＼人のよしあしなどをいふいとまあるものにあらず。よみかきハ家業のさハリになるものにあらず。そのことなしとぐるときハ無量のたのしみありて、極楽世界といふに常在して、よをみることはなハだ明白なり。した(慕)ひ、なる(習)ふべきも、い(忌)み、つゝし(慎)むべきことも、それ／＼にこゝろに是をよくしらべ侍るゆへに、すこしも愚痴の悪病をうけず。寿命ハ人々このみて長短のかぎりをなしとげ侍ることあたはず。たゞ一日もゆたかにこゝろをきよくもち侍るを、富貴の人とハいふなり。五年三年のいのちも短しとせず、七十年八十年もながしとせず。ただ片時もこゝろよく人界をすみはて侍らんとおもふこゝろを、学成就とも、禅家に是をさとるともいふことになん。

ゑりにつくといふことあるが、勢につきて、ついせふ軽薄のものをいふとなん。格別に得分あることが、礼と敬といふにハあらず。局にあたるものハ迷ふ、傍観のもの、はなハだ明なりといふは、碁のことバなり。恩をわすれ義をうしのふなどハ、多くゑりにつくといふ。しかれば、人にあらざるが大につゝしむべきことなり。しかれども、それハまた、自然とその人あるものなればこそ、よゝ人をゑらびの事あり。

人ハみな人の様なれば、人を扱ふといふことハあるまじ。よき師友をもとめてよき事をきけよ、しれよといふ書をよめよ。むかしの忠信義誠の人々と、人の道理をしらざるものと、一々記録し侍るをよむなり。聖賢の教ハ孝弟忠信、仁義礼智なり。人を成就し侍るなり。恐るべし、慎むべしといふも外のことにあらず。人心を失却すまじきを教のもとゝするなり。

人の生質その国によりて、よしあしありといふ。真とすべからず。江戸などハ女の気もちあら／＼敷覚ゆといふ。みやこハやさしくしほらしくなどいふも、ことバのみやびやかなる、すがたも是に準じ侍るといふなれども、そのこゝろにハ、ミヤこもいなかもなきものにして、人ハみな同じ人なりとすべし。その真の人と、真の人にあらざるとは、いづれの国を定めいふにあらず。むかしより善者悪者あればこそ、教もあることにして、女ハことにつゝしみたしなみ多きものなり。しかるに、その慎みたしなむことをしらで、かりそめにもあら／＼しき大声をなりわめかし、人の子を打ちやくし、眉間にきづ／＼け侍る様なる。よこしまし侍るなどハ、気ちがいのしハざが所のもの、此女をゝそるゝ事、悪鬼のご

とくとうざけ侍る夫もありといふなれども、婦を制するの道をしらざるか、その女にハうたぬと見へ侍るなどいふうハさもあるハ、女の氣にあふやうによるづこゝろへ侍るが、この男もその女の趣によく似たりなどいふこともきけり。かゝるものをめしつかふ人のこゝろのやすからざる、おもひやるべし。

勸善といふもんじハ、善事をひたすらにすゝめて人々を善人にせよといふことなり。懲悪といふもんじハ、あしきことにこりよといふ。あしきをあらためてよきにうつる、きのふの外道も今ハ仏となり侍る。人のおもふ所、うそにもよき事をすれば、人々みなつゝしみおもふこゝろになり侍るなり。うそもまた真実のよきに定る。あしきを見てハ、にへゆをさぐるごとくにせよと教へたもふなり。悪むべきものをバにくめよと教へたもふも、にくむ事なきやうにと思召ての事なり。衆善奉行といふもんじハ、もろ／＼の善事を行ひたてまつれとなり、此八字を一生の宝とし、是を子孫にゆづれと教へたもふなり。大学にも、楚国には別の宝なし、唯善のみを宝とし侍ることを、人々よみて是をしる事なり。

貨植マツの事ハ、史冊マツごとに是を詳に記載し侍り。文士などのよろづ未熟にして、はや貨植マツのこゝろざしあるは、学業成就マツこゝろもとなし。たゞ、その貨を守るこゝろを專一とすべし。そのうちに師友のよきを得て、脩身齊家の道理を詳にすべし。父祖・つたへうけし家財を散尽すまじき事なり。司馬公の陰徳を冥々のうちには是をつみて子孫にあたへよとあるを、能々こゝろへあるべし。金をつみ、たからをつみ、書画をつみ、典籍をつみあたゆといふとも、子孫是をたまたずとあり。温国公ほどの御人すらなをかくのごとし。無能無徳の者、かねばかりもちたればとて、醜行のみにして、終にハ路傍の乞児となり侍るためし多き事なり。こゝろへあるべし。慎と守といふことをつねのこゝろとし、あるべきやうに皇天をいたゞき奉る。分相応の施は、なしとげたきものぞ、施をバ受くまじきぞと、決定すべし。人の盛衰を能々見て其道理を能々考ふべし。

無我無心無能無芸にして、旦那の信施を費し侍るをはなハだ忌むなり。古徳の示にも、だんなの水を飲こと得ざれ、水をのむハ血をのむがごとし。阿蘭若（寺の事）に住すること得ざれ、住所は墓を守るがごとし。いかさまはかを守り、血をのみくらし侍るやうにおもふなり。大灯の語に、むらさき衣を着し、大寺院に住するものみな、わが（我）児孫にあらず。山林草野の間、一草庵を結び、野菜根を食ひ、己躬下の事を發明するものあらバ、千歳の後といふとも、日々老僧と相見の分ありと示し侍り。しからバ紫衣紅衣を着し、そのいろにて其座格を定め、是を出世と心得たるハ、まことの釈民にハあらず。息心など一度僧となり侍るなれども、女犯肉食を守ることあたはず。ひそかにぬすみおかし食ふも心

と面と二いろにせんこと甚だ勞なり。ゆへに、一いろを止てひとりし侍るなり。それゆへに腰ぬけの痿といふ病をうけしぞ、などいふものもありといふ。俗に罰をかぶりたるなり。

不思議に七十歳の春を迎へ侍る。杜少陵の、人生七十古来稀なりといふ句名たかくて、今ハ七十を古稀といふ。むかしより七十も八十もまゝあれ共、人らしきハ稀なりといふことにして、その稀れなる中の古稀にハあらず。このころ水くみて渡世し侍る老あり。としを問ひければ、八十三歳となん、酒代を子共の苦にならぬ為にとて、この水くみ侍ると答へき。かゝる者の無事に天寿を得侍る。是ハ実に無我無心のものところへ、来たひごとに一杯の酒を施し、其よるこびの顔色をたのしみ侍る。

子期伯牙、高山流水などハ琴曲の妙を弾ずる人、是をきく人、その人その人を得たるの神交不可思議の妙所、たゞその二人にして外なし。知音といふ名高きことになれり。琴の音にかぎることにあらず。よろづ人と人と、心と心と相知といふ所、君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友の間にも、この音をしろとしらぬと白首までもいまだしらざるあるに、一見してすなハち知るといふもあり。まことあれバまことある人をする。むかしより、多くハ得がたき事にしたり。小うた浄瑠璃なども人の心のもとをたゞしく工夫して、人々感慨あるやうにと、文も手もその調子を大事に、喜怒哀樂のわかちよく、宮商角徵羽の五音を正し、人の自然の道理分明なる是を詩にし歌にす。たゞに平仄さへ合へバよしといふにハあらず。三百篇を聖人御覧らびたもふ道理、千古人の教へとなる道理を能々こゝろへよと、そのことをこゝろへたる人教へ侍り。樂府題の詩をうつし出し侍る。

涼州謡 王翰 「以下略」。

息心筆記 癸亥十月廿四夜更起
息心居士居不泉州城人しや丁未まよし
あれさてふらふと門外かきまよし
うらやうて懶廢しし 而もあつこひを
ぬすむ六人入さふさうしん 赤鹿うハ
振動しして内ハちと 畑わり
空の向ハみあう 一ハハ其安を 坐せし
一ハハ 輪墓の誌并と 息心帝を 向とし
臥せまこと 以向と 定めたり 一ハハ 業籍を
フミまこ 四時乃 勤來 外見カレを 收拾し
一ハハ 海舟し といふ 人の 徳を ことと
とりやうらひたりなり 一ハハ 電うし 一ハハ
二時乃 粥飯を 喫し 物 思ふ こと 三
十夜より も あつこひ 是より 大分ハ
いふ こと 是より 小分ハ こと 又
すこ ね こと 是より 無量無邊
不衆生なり

人ねハ息心れて四人なり 王翰墓の杖
脚と 雲う 物なり
四人頭を 聚めて 一ハハ ことと
一日と 怪し 物なり 息心今より
七十歳より 五十歳より ころし 一ハハ
西ハ大す 一ハハ 東ハ小ハ 一ハハ 金華山ハ
此所ハ 一ハハ 本管地ハ 祝来し 作
こと 一ハハ 山川ハ 一ハハ 一ハハ 事と 一ハハ
一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
十日ソフ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
人ハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
本ハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
知者ハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
いハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ
こと 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ 一ハハ